

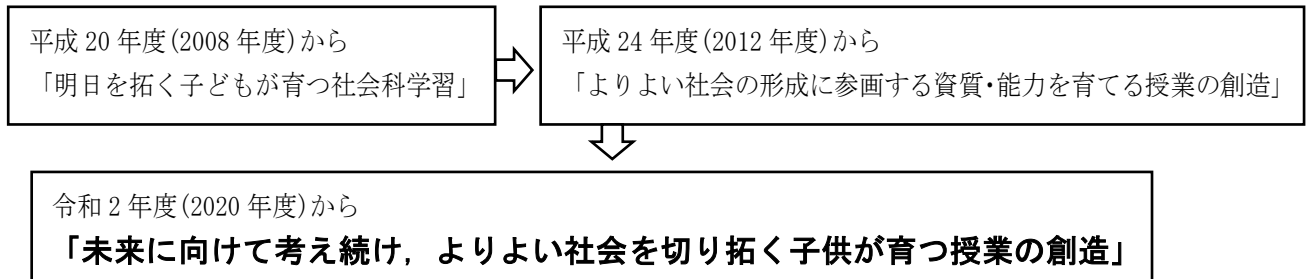
令和2年度 社会部会研究計画

1 研究主題

未来に向けて考え続け、よりよい社会を切り拓く子供が育つ授業の創造
－見方・考え方を働かせて、社会に対する認識と判断する力を育む单元構想と授業展開－

2 研究主題・副主題について

(1) これまでの研究の経緯



本県では、平成 20 年度（2008 年度）より「明日を拓く子どもが育つ社会科学習」という主題のもと、研究を進めた。「明日を拓く子ども」とは、「明日の社会を拓く子ども」「明日の学びを拓く子ども」「明日の自分を拓く子ども」の総称であり、めざす子ども像を示した言葉である。本主題のもと、子供の主体的な問題解決的学習の過程に、価値判断・意思決定する場面を意図的・計画的に設けた社会科学習について研究を深め、平成 22 年度（2010 年度）全小社研徳島大会において全国へ発信して大きな成果を得た。

平成 24 年度（2012 年度）からは、「よりよい社会の形成に参画する資質・能力を育てる授業の創造」を主題に掲げ、研究を進めた。これは、平成 20 年（2008 年）告示の学習指導要領の「改善の具体的事項」の中で「身に付けた知識，概念や技能などを活用し，よりよい社会の形成に参画する資質や能力の基礎を培うことを重視して改善を図る」ことが示されたことを受けたものである(1)。構造図による認識の整理，判断する力の育成について研究を進めた。よりよい社会の形成に参画する資質・能力として特に，社会に対する「認識」と「判断する力」の両輪をバランスよく育てることが重要であることが見えてきた。

上記 2 つの研究主題は、いずれも「未来」に向けて、今、子供たちにどのような力を、どのように育むべきかを問うものである。

(2) 本研究主題について

本研究主題は，上記 2 つと方向性を同じにした上で，深化をめざすものである。

平成 29 年（2017 年）告示の学習指導要領では，総則において以下のような考えが記されている。

- ・子供たちが未来社会を切り拓くための資質・能力を一層確実に育成することを目指す(2)
- ・どのような未来を創っていくのか，どのように社会や人生をよりよいものにしていくのかという目的を自ら考え，自らの可能性を発揮し，よりよい社会と幸福な人生の創り手となる力を身に付けられるようにすること(3)

未来の社会を切り拓く担い手となる子供を育てるために，社会科としてどのようにアプローチできるのか考えていく必要があるだろう。また，18 歳成人の時代を迎える中で，子供たちが成人として生きる未来は厳しい挑戦の時代とされる。前述の総則において次頁のような記述も見られる。

- ・今の子どもたちやこれから誕生する子どもたちが成人として社会で活躍する頃は、我が国は厳しい挑戦の時代を迎えていると予想される。生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、予測が困難な時代となっている(4)
- ・人工知能が自ら知識を概念的に理解し、思考し始めているとも言われ、雇用の在り方や学校において獲得する知識の意味にも大きな変化をもたらすのではないかと予測も示されている。このことは同時に、人工知能がどれだけ進化し思考できるようになったとしても、その思考の目的を与えたり、目的のよさ・正しさ・美しさを判断したりできるのは人間の最も大きな強みであるということの再認識につながっている(5)

北俊夫は、学校教育における社会科の役割として「よりよい社会の形成者を育成する」ことを挙げた上で、「人生の究極的な『主体的な学び』は生涯学習に取り組むこと」であるとし、「学校での『主体的な学び』の体験は、将来の『主体的な学び』に備えて、学びつづける意欲や態度や能力を育てることにつながる」ことを述べている(6)。また、澤井陽介は、「人が社会のなかで生きていけば、何かしらの問題に直面」すること、「そうした問題を解決するにはどうすればよいかを考えながら、情報を活用しつつ解決していける土台づくり」をすることの重要性を述べている(7)。予測困難な未来の社会を切り拓いていくためには、小学校社会科の学習で学んだことをもとに、学校教育を終えた後も、自分自身で「考え続けていく」ことが求められる。このような点をふまえ、研究主題に「未来に向けて考え続け」というキーワードを盛り込み、これまでの本県の研究のさらなる深化・拡充を目指すこととした。

(3) 本研究副主題について

◎社会に対する認識と判断する力の両面

副主題「見方・考え方を働かせて、社会に対する認識と判断する力を育む単元構想と授業展開」

本県では2016年度から、社会に対する「認識」と「判断する力」の両面をバランスよく育む研究に取り組んでいる。社会的事象の「見方・考え方」を働かせる中で、認識を深めるとともに、根拠をもって選んだり主張したりする力を育む社会科学習をめざして研究を進めた。昨年度までの徳島市大松小学校や吉野川市立知恵島小学校を中心とした研究によって、「認識」と「判断する力」の両輪をバランスよく育むために「認識と判断が相互にかかわる場面」をいかに設定するか、その場面においてどのような手だてを講じればよいかが見えてきた。

このような研究の成果を土台として、本年度は単元全体へと研究の視野を広げてみたい。単元の中で子供の意識をつなげていくにはどうすればよいのだろうか。また、単元の各過程において「認識」と「判断」の両輪をバランスよく育む学習は可能なのであろうか。「認識と判断が相互にかかわる場面」を引き続き中核としつつ、単元全体として「認識」と「判断」の両面をバランスよく育む研究へと深化をはかりたい。



三層	六段階
Ⅰ問題把握	①問題をつかむ
	②予想をたてる
	③調べ方をきめる (見通しをもつ) (学習計画をたてる)
Ⅱ意味把握	④調べたしかめる (ひとりやグループで調べたしかめる)
	⑤みんなで考え話し合う (考え話し合ってまとめる)
Ⅲ発展	⑥ひろげ深める

※昨年度まで、④は「ひとりで調べる」
⑤は「みんなでたしかめる」と表記していた。

これらのことをもとに本年度は、昨年度までの研究に引き続き、社会的事象の見方・考え方を働かせる社会科学習を展開して、「認識」と「判断する力」の両面をバランスよく育てていくことができるようにする。社会の意味や特色がしっかりと分かり、根拠をもって選んだり主張したりする力を身に付ける。そして、未来に向けて考え続け、よりよい社会を切り拓いていく子供が、本研究でめざす子供像である。

3 研究内容について

【研究内容1】 単元構想と振り返りの工夫

(1) 子供の意識をつなげる単元構想
 本時の前後を中心として、子供の意識をつなげる単元構想を行う。

(2) 子供の意識をつなげる振り返りの工夫

① 振り返りの観点の工夫
 ② 子供の考えを見取る工夫
 ③ 子供の考えを広める工夫

三層	六段階
Ⅰ 問題把握	①問題をつかむ
	②予想をたてる
	③調べ方をきめる (見通しをもつ) (学習計画をたてる)
Ⅱ 意味把握	④調べたしかめる (ひとりやグループで調べたしかめる)
	⑤みんなで考え話し合う (考え話し合ってまとめる)
Ⅲ 発展	⑥ひろげ深める

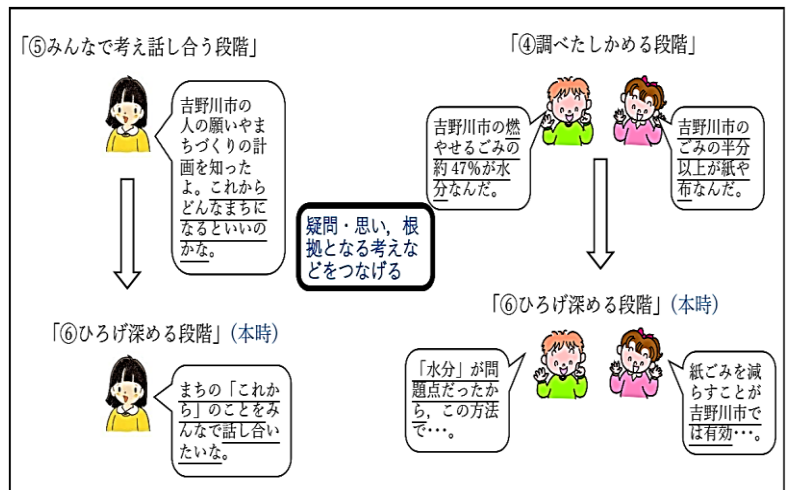
※昨年度まで、④は「ひとりで調べる」
 ⑤は「みんなでたしかめる」と表記していた。

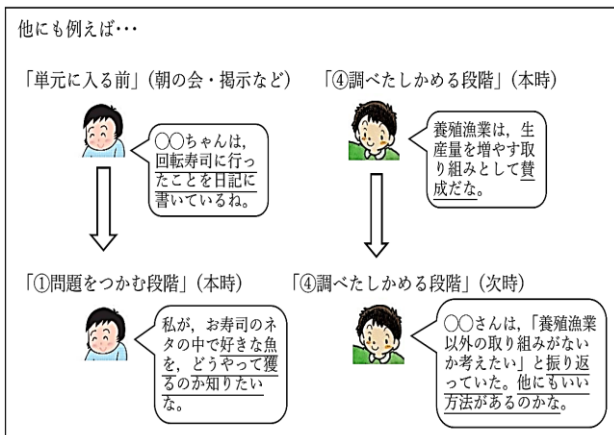
徳島県では、歴史的に「三層六段階(8)」の問題解決的な学習過程を土台として単元づくりを行っている。具体的には右上の図のようなものである。問題を自分のものにする「問題把握」、問題を解決する「意味把握」、解決の発展を図る「発展」の三層からなる。その三層を六つの段階に分けている。

昨年度までの研究では、⑤もしくは⑥において認識と判断する力の両輪を育むことに注力してきた。しかし、それ以外の段階がないがしろにされてきたわけではない。個々の先生方によって工夫がなされて単元が構成されてきただろう。個々の先生方がこれまで行ってきた単元づくりの工夫に対して意識的に焦点をあて整理していくことが、研究の深化につながるだろう。

(1) 子供の意識をつなげる単元構想

統一大会（吉野川大会）の第3学年では「吉野川市のうつり変わり」の授業が公開された。その単元中の「⑤みんなで考え話し合う段階」において、「吉野川市の様子や人々のくらしの移り変わりについて話し合う」という学習がなされた。そこでは、「吉野川市民のくらしがどう変化したか」や「吉野川市民の願い」「吉野川市のまちづくりの構想」などについても話し合われた。子供たちの意識が「吉野川市のこれからを考えたい」というところに向いただろう。その上で、「さらに住みやすい吉野川市にするためのアイデアを考える」場面（本時）につないだ。前時の学習とつながることで、自然と問題意識が芽生え話し合う姿が見られた。また、同大会の第4学年では「ごみはどこへ」の授業が公開された。その単元中の「④調べたしかめる段階」において、「市・地域・家庭でのごみを少なくする取組について調べる」という学習がなされた。そこでは、「吉野川市の燃やせるごみに入っている水分が全体の約47%であること」や、「吉野川市のごみのうち、約55.7%が紙や布類であること」などが話し合われた。





これらは、吉野川市のごみ処理に見られる課題である。そのような学習を経た上で、子供たちは本時(「⑥ひろげ深める段階」)において「吉野川市のごみを減らすために、自分たちにできることを選択・判断する」場面につないだ。単元の学習で学んだ具体的な課題を根拠に話し合う姿が見られた。

他にも左図のように、単元に入る前からの意識のつながりを想定して本時である「①問題をつかむ段階」の学習へつなげたり、「④調べたしかめる段階」の学習同士をつなげたりも考えられる。

このように、本時前後のつながりを意識して単元の各段階における学習を構想することにより、子供の中で学習がつながっていくのだろう。本時まで、「どのような思いを高めておくか」「どのような疑問を深めておくか」「どのような調べ学習を行っておくか」「どのような振り返りを取り上げるか」などを構想したり、本時の後、「学習したことがどのように次の学習につながるか」「判断したことがどのように次の学習につながるか」など構想したりすることにより、子供の意識がつながる単元となるだろう。

(2) 子供の意識をつなげる振り返りの工夫

(1)の構想を具現化する際の方策となるのが、振り返りの工夫である。子供が自分自身の学びを振り返ったり、教師が学びを見取ったりする際の工夫を考えていきたい。子供の振り返りや教師による見取りを充実することが、単元の各段階の学習をつないでいくこと、単元全体を通して認識と判断する力の両面を育むことに大きく寄与するだろう。

①振り返りの観点の工夫

自分自身がどのように認識が深まったのか、どのように判断を下したのかななどを自覚できるように振り返りを取り入れることで、次の学習、次の展開、さらには未来に向けて自らの意識をつなぐことができる。例えば、次の3つの振り返りの観点が考えられる。

ア、学習内容や学習方法について自覚する観点

イ、自身の変容を自覚する観点

ウ、未来の社会や未来の自分へと意識をつなげる観点

アは、学習内容や学習方法についての振り返りである。統一大会(吉野川大会)の第5学年では「ICTを活用して発展する販売業」の授業が公開された。授業の終末、本時の学習を振り返るにあたって「産業の発展」「販売者」などのキーワードを設定した。キーワードを設定したり、「分かったことは…」「今日の私の結論は…」などの書き出しを設定することにより、学習内容と自分の考えをつなげて振り返ることができるだろう。また、右の資料のように「あなたは今日どのような調べ方をしましたか」や「いいなと思った友達の調べ方はありましたか」などの質問を投げかけることにより、自らの学習方法にも目が向くだろう。特に、未来に向けて考え続ける

社会科学習の振り返り(例) 名前()

学習をふりかえるときに次の「2つ」のことを意識して書けるといいですね。自分が意識した番号や記号(②・ウ など)も書いてみましょう。

○今日、どんな風に「調べたり、話し合ったり」をしたか。【学習の仕方】
(例) ①今日の調べ方(考え方、話し合い)を振り返ってみると…
(今日、どんな風に調べたり、考えたり、話し合ったりしましたか?)

②「いいな」と思った友達の調べ方(考え方)は…
(あなたが、参考にしたい友達の調べ方や考え方はありましたか?)

③これまでの学習の調べ方(考え方)を生かして…
(今までの学習の調べ方や考え方を生かした場面はありましたか?)

④次にやってみよう調べ方(考え方)は…
(次に生かせそうな調べ方や考え方はありましたか?)

⑤なっとくできた(できなかった)友達の考えは…
(賛成や反対をしたい友達の考えはありましたか?)

⑥その他

○今日、どんなことを「分かったり考えたり」したか。【学習の身身】
(例) ア、学習前は□□と考えていたけど、学習後は○〇…
イ、□□ということを考えて…
ウ、□□ということが分かって…
エ、今日は、□□という結論になって…
オ、これから考えていきたいことは…
カ、その他

という主題に応えるためには、**学習内容はもちろんのこと、学習方法について自覚をすることが重要**である。次の学習や実社会においてその学習方法は活用できるものだからである。

イは、自身の変容を自覚する振り返りである。知恵島小学校では「振り返りシート」を用いて、学習前後の考えが比較できるように工夫をしていた(9)。前時の自分の考えと本時後の自分の考えを1枚のワークシートで見比べられるようにしたり、毎時間の振り返りを同じ1枚のワークシートに書き留めていき1時間ごとの自分の考えの変容を一覧できるようにしたりした。また、「学習前は…学習後は…」や「はじめは…とっていたけど、話し合っ…」などの観点を示すことにより、子供たちは**自分の学習前の考えと学習後の考えを比べる**だろう。自分の認識や判断の深まりを実感することで、自信をもって学習を積み重ねていくことができる。

ウは、未来へつなぐための振り返りである。ここで言う「未来」は、次の時間や次の単元などの次の学習という意味合いとともに、将来の自分の生活や将来の社会のあり方を指す。①②のような「学んだことをさかのぼって自分の言葉で整理する」という振り返りに加えて、単元の各段階をつないでいたり、未来に向けて考え続けたりする場合、「これから」を考えることが大切であろう。「学習でまだ分からないことは…」「残った疑問は…」「これから考えていきたいことは…」など次の学習につながる観点や、「これから自分の生活で…」「これからの社会は…」など未来につながる観点を示すことで、子供は、**今の学びと未来のつながりを考えるようになる**のではないかと。

②子供の考えを見取る工夫

子供の考えを教師が見取ることで、次の展開へと生かすことができる。これまでの研究から、どのように見取ればよいかという工夫も見えてきている。ここではその一例を示す。

- ・単元の導入前などに、アンケートを実施する。
- ・考えの立ち位置の変化が見えるようにワークシートを工夫する。
- ・単元の導入と本時で、同じ問いかけを投げかける。
- ・授業後にインタビュー形式の対話を行う。
- ・毎時間の振り返りシートを用いる。 など

単元導入時などにおいて次頁のaのような社会科アンケートを実施することにより、子供の今の考えや関心を把握することができる。また、bのようなワークシートを用意することにより、話し合いによって子供一人ひとりの考えが変容したかを見取ることが可能となる。cは見取り表の一部を示したものである。単元の導入時と中核場面の両方で「理想のコンビニはどのようなものか」を問うて、その問いに対する子供の考えを表の形で整理したものである。単元前と現在でどのように考えが変容したのかを見比べることができる。

また、振り返りの記述を教師が読んだときに、抽象的であり意味が伝わりづらい場合、どのような意図で書いたのが伝わりづらい場合がある。例えば、c(5番)「コンピュータの力も人の力も合わせて、消費者にとっても販売者にとっても便利な店になると良いと思う」と書いた子供に対して授業後に、「消費者にとって便利な店ってどんな店なの?」「販売者にとって便利な店ってどんな店なの?」と問いかけると、子供の言葉で意味を語ってくれるだろう。記述だけから見取るのではなく、時には授業後の対話を取り入れることにより、より具体的に子供の考えを見取ることができるだろう。

社会科アンケート ()年()月()日

●これはテストでは、ありませんので、思った通り書いてください。

①「情報」と聞いて思いつくことを書きましょう。
(何でもかまいません。いくつ書いてもかまいません。)

② 聞いたことがある「○○情報」という言葉を書きましょう。(いくつ書いてもかまいません。)
例)交通情報、個人情報など

③「情報」とは、どのようなものだと思いますか。
(あなただけの考えでかまいません。)

④「情報」は、どのようなところで、どんな風に使われていると思いますか?
(いくつ書いてもかまいません。)

a 「社会科アンケート」

発見！みそづくりのひみつ (2)月(1)日

取材メモNo.(7)

めあて 志まやは昔とくらべくじのくわいかわったの4話しよう

①めあてに対する自分の考え (このあたりかなと思うところに○をつけましょう。)

②そのように考えた理由

③友達との話し合い

学習者のふりかえり (このあたりかなと思うところに○をつけましょう。)

〇〇〇さんの考えを聞いて…
 新聞に書きたいことは…
 学習者は…学習後は…
 新聞で「志まや」を紹介するなら…
 今の自分の考えは…
 「志まや」のみそづくりは… など

学習前はたくさん変わっていると思っていたけど、学習後はあまり変わっていないと思つようになりました。そのわけは、ふえてるといっても、100点のみそを作るために、べんりになつたり、よりよいくくり方にしたただけです。寺作

b 「考えの立ち位置の変化が見えるワークシート」

10/15 事前アンケートⅢ 1. 理想のコンビニ	11/2ポストテスト 2. これからの理想のコンビニ
1. おにぎりがすべて1円。 お菓子が安い。 品物を100円買うとゲームができる。	レジは全自動でコンピュータがするけれど、掃除などは人がしたらもっと効率よく、でも、床はきれいななど というような店にしたらしい。
2. タブレット化 無料デーが年に1度ある。	レジは自動になって人はレジの前に1人・2人ぐらいいくなる。中には人が調理をしている。発注は店長が決めている。
3. セルフレジ。 品物が安い。	自動レジや色々な機械がコンビニにあり、でも、店員さんも何人かいるコンビニがあるといいなと思う。調理をしたり、商品を並べたりするのは、店員さんでなければできないことだから。
4. ロボットがいて、自分がいるものをとってきてくれる。 レジで自分が会計を済ませると入り口に持ってきてくれる。	ロボット(AD)だけではなく、「人」の能力を生かして協力しながら、よりよい店にしていければいい。
5. お菓子がたくさん揃っている店	コンピュータの力も人の力も合わせて、消費者にとっても販売者にとっても便利な店になると良いと思う。

c 「見取り表 (単元前と本時で同じ問いかけ)」

③子供の考えを広める工夫

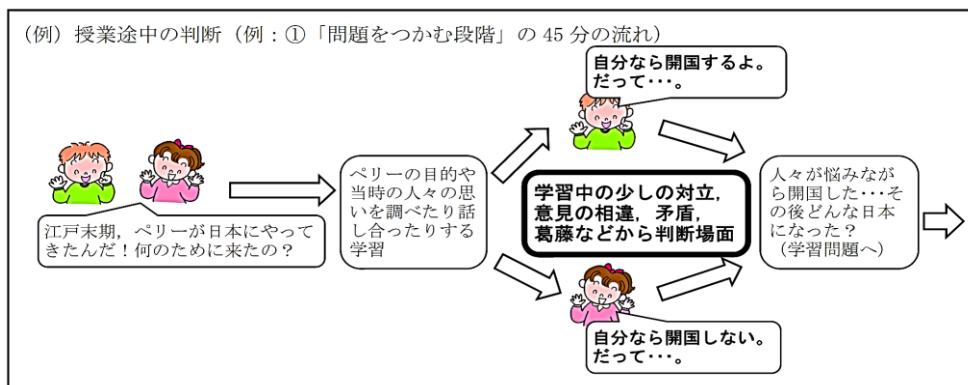
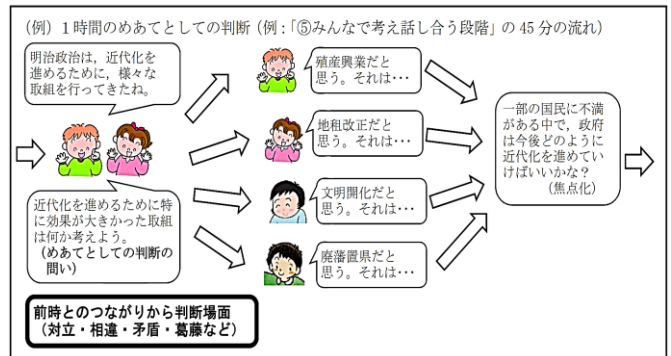
知恵島小学校では各クラスで学びの記録を背面に掲示し、学習において活用していた。背面掲示を工夫して、友達がどのような考えをもったのか、どのような振り返りをしたのかを広めることができるだろう。その中で、意図的に対立する意見を掲示するなどすることで、判断場面につなげることも可能となる。また、授業の冒頭で意図的指名をして考えを広める、見取り表を配布して友達の見解を手元に置いて自分の考えを深めるなどの工夫も考えられる。

【研究内容2】単元の各段階における判断場面の設定
単元の各段階において、認識と判断する力の
両輪を育む。

統一大会（吉野川大会）第6学年では「明治の新しい国づくり」の授業が公開された。本時として公開されたのは、「⑤みんなで考え話し合う」における判断場面であった。（右図参照）「明治政府は近代化を進めるために、様々な取組を行ってきた」という前時までの学習とのつながりを意識した上で、「近代化を進めるために特に効果が大きかった取組は何か考えよう」という、めあてとしての判断の問いを投げかけて場面設定をしていた。⑤や⑥の場面における判断場面について、これまで同様研究を深めていきたい。

一方で、単元の他の段階（⑤や⑥以外）においても判断場面を設定することも可能であろう。授業者は、単元の中の「①問題をつかむ段階」において、「ペリーが日本に来た目的について考える」という学習がなされていた。（下図参照）ペリーが来航した意図や当時の人々の思いについて話し合う中で、「（開国を迫るアメリカに対して）返事を先延ばしすべきか、それとも開国すべきか」を考える場面を設定し、その後の学習問題づくり（「明治の新しい国づくりは、何を目指してどのように進められたのだろうか」）へとつないだ。

三層	六段階
I 問題把握	①問題をつかむ
	②予想をたてる
	③調べ方をきめる (見通しをもつ) (学習計画をたてる)
II 意味把握	④ひとりで調べる (ひとりやグループで調べたしめる)
	⑤みんなでたしめる (考え話し合ってみる) (みんなで考え話し合う)
III 発展	⑥ひろげ深める



他にも次のような判断場面が具体例として考えられる。

- ・(日本の特色ある地域の学習の導入で)『日本はどんな所』と外国の方に聞かれたら何と答える?」(①)
- ・(江戸時代の学習への導入で)「(分国法や下剋上などの中で)自分が徳川家康なら絶対なくておきたいことは何?」(①)
- ・(警察の仕事の予想を話し合う中で)「交通事故を減らすにはどうすればよいか?消防の学習を生かして考えよう」→実際に調べていこう(②)
- ・(調べ方を話し合う中で)「〇〇についての情報はだれにインタビューするのが一番いいのだろうか?」(③)
- ・(自由民権運動を表す絵資料をもとに調べる中で)「自分なら垂れ幕にどのような言葉を入れるか?」
「演説の中で警察官がストップをかける言葉は何か?」(④)
- ・(源頼朝・源義経を調べる中で)「自分が頼朝なら朝廷から役職をもらった義経を許す?」(④)

このように、単元の中の様々な授業場面において子供たちの少しの対立や意見の相違、矛盾、葛藤などを見出し、判断場面を設定することにより、より一層認識と判断する力の両輪が育まれていくのではないか。1時間まるごと判断を話し合う学習だけではなく、学習問題をつくる中で少し対立を取り上げる、調べたしかめる中で少し葛藤を取り上げるなどの形で判断場面を設定することが可能ではないか。

ただし、①～④で判断場面を設定する場合、調べ学習を終えた後（⑤や⑥）と比べて判断が浅いと感じられる場合もあるだろう。しかし、ここで大切なのは、その時点まで身に付けた認識（前単元までに身に付けた認識や生活経験も含めて）を精一杯活用して根拠を見出し、現時点のその子なりに全力を尽くして判断ができるようにしていくことである。現時点の認識を精一杯活用し判断することを繰り返し経験していくことが、認識の深まりと判断する力の高まりにつながる。また、認識が不十分な状態で判断をすることにより、「自分が根拠としたことには何が足りないのか（どんな認識が欠けているのか）」「自分が判断したことが本当にそう言えるのか確かめないといけない」のように子供が自身の認識や判断に対して問題意識を感じて次の学習への意欲を強めたならば、それもまた認識の深まりや判断する力の高まりにつながるだろう。

【研究内容3】見方・考え方を働かせる教師の手だて

- ①発問について（焦点化する問いかけ） ゆさぶる、切り返す、整理する など
- ②資料について（追究の視点や方法を意識した資料） 年表、地図 など
- ③板書について（社会の仕組みや関係が見える板書）
- ④ツールや ICT の活用について（主体的・対話的で深い学びにつながるツールや ICT の活用）

昨年度までの研究では、「認識と判断が相互にかかわる場面」という場面において、いかに手だてを講じるかについて研究を進めてきた。その研究の成果は、単元の中の他の場面においても有効であると考えられる。具体的な4つの手だてを継続して研究としたい。

①発問について（焦点化する問いかけ）

子供が判断して発言したことを生かして焦点化する問いを投げかける（ゆさぶる・切り返す・整理するなど）ことにより、見方・考え方を働かせ、認識を確かなものとしたり、子供同士が活発に議論できるようにしたりする。

②資料について（追究の視点や方法を意識した資料）

「位置や空間の広がり」「時期や時間の経過」「事象や人々の相互関係」などの追究の視点、「比較」「分類」「総合」「関連付け」などの追究の方法を意識して地図、年表、関係図などの資料を工夫して提示することにより、見方・考え方を働かせ、議論をする際の根拠となるようにする。

③板書について（社会の仕組みや関係が見える板書）

社会に生きる人々の関係性や社会の仕組みが子供に見えやすい板書へと子供の発言を整理することにより、見方・考え方を働かせ、議論の流れが可視化できるようにする。

④ツールや ICT の活用について（主体的・対話的で深い学びにつながるツールや ICT の活用）

「何のために」「どのタイミングで」「どのようなもの」用いるのかを考えた上でツールや ICT を活用することにより、見方・考え方を働かせ、考えを表出したり議論を整理したりできるようにする。

4 確認事項

(1) 本年度の研究の中心について

これまででは、本時として右図の⑤や⑥の段階を中心に実践をおこなってきた。本年度は、単元全体に視野を広げるため、①問題をつかむ、②予想をたてる、③見通しをもつ、④調べたしかめる段階を公開する授業も増えてくると考えられる。各段階における研究の充実が、研究の深化につながる。ただし、⑤や⑥の段階を公開してはならないということではない。単元の他の段階における学習とのつながりを意識した上で、⑤や⑥を公開することももちろん研究として価値がある。

三層	六段階
I 問題把握	①問題をつかむ
	②予想をたてる
	③調べ方をきめる (見通しをもつ) (学習計画をたてる)
II 意味把握	④ひとりで調べる (ひとりやグループで調べたしかめる)
	⑤みんなでたしかめる (考え話し合ってまとめる) (みんなで考え話し合う)
III 発展	⑥ひろげ深める

(2) 判断場面について

昨年度までの研究において「判断場面」は、六段階の中の⑤⑥に設定する「認識と判断が相互にかかわる場面」のことを指していた。本年度はそれに加え、①～④で設定する、授業の中で少し判断をするような場面も含めて「判断場面」と呼ぶこととしたい。

(3) 単元構造図について

これまでの研究を経て、単元の構造図(旧 知識の構造図)の作成を進めてきた。今回、研究の内容としては入れてはいないが、これまでの研究の成果を踏襲し、継続して指導案に表記して教材研究に役立ててはどうだろうか。もちろん、その形やあり方なども提案を受け、柔軟に改良を加えていってよいだろう。

<注釈>

- (1) 文部科学省『小学校学習指導要領解説 社会編』2008年6月, p.4
- (2) 文部科学省『小学校学習指導要領解説 総則編』2017年7月, p.2
- (3) 前掲(2), p.3 (4)(5) 前掲(2), p.1
- (6) 北俊夫『主体的・対話的で深い学びを実現する社会科授業づくり』明治図書, 2018, p.18
- (7) 澤井陽介『社会科の授業デザイン』東洋館出版社, 2015, p.57
- (8) 三層六段階における六段階は、1978年10月の全国社会科教育研究大会(徳島大会 八万南小)にて「①問題をつかむ」「②予想をたてる」「③調べ方をきめる」「④ひとりで調べる」「⑤みんなでたしかめる」「⑥ひろげ深める」であると示された。本研究においてもその考え方は継承する。ただし、③④⑤について言葉として以下のように表したい。
 - ・③「調べ方をきめる(見通しをもつ)(学習計画をたてる)」
※「調べ方」だけではなく「学習の手順などの計画もたてて見通しをもつ」という意味合いが伝わりやすいように。
 - ・④「調べたしかめる(ひとりやグループで調べたしかめる)」
※理念として自力解決・自主的な活動を示すものであり、実際の学習においては、必ずしも「ひとり」でなくてもよい。また、調べたことを共有する学習も実際には見られることから。
 - ・⑤「みんなで考え話し合う(考え話し合ってまとめる)」
※理念として協働的な解決・協働的な思考を示すものであり、必ずしも「たしかめる」だけに留まらず練り合う段階であるため。
- (9) 「令和元年度徳島県小学校社会科教育研究大会ー吉野川大会ー」研究紀要 p10